もうひとつの恋文

連城 三紀彦

新潮社

もうひとつの恋文

連城 三紀彦

もうひとつの恋文
定価九八〇円

一九八六年七月一五日　発行
一九八七年九月三〇日　七刷

著者　連城三紀彦
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七十一番地
電話　東京(266)五一一一(業務)
東京(266)五四一一(編集)
振替　東京四-八〇八　〒一六二
印刷　二光印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Mikihiko Renjō, 1986, Printed in Japan.

ISBN4-10-347503-X C0093

目次

手枕さげて——5
俺ンちの兎クン——45
紙の灰皿——95
もうひとつの恋文——135
タンデム・シート——179
あとがき——224

装幀＊早川良雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

もうひとつの恋文

手枕さげて

枕なんだぜ。最初が枕なんだぜ。ピンクの花柄のカバーかぶせたのを、トランクの中から真っ先にとりだして、こう、胸に抱きしめて、ニッコリ笑いやがるの。そう、入ってくるなりだよ。入口に突っ立ったままでさあ。

「何してるんだよ」

って、俺、一昨日の晩も酔い潰れて戻ってきて、服のまま万年床に倒れこもうとしたところだったろう、夜中の三時をまわろうって時に、二、三度会っただけではっきり顔も憶えてない女が訪ねてきたっていうだけで驚きなのに、最初から枕じゃキョトンとするより他ないよな。

けど、むこうの方では俺が驚いてるのなんてどうでもいいって感じで、「あっ、そういう顔すると可愛いじゃない」なんて言ってさ、

「鍋はあるみたいだから、枕さげてきたの」

入口の続きに小さな台所があるだろ、そのレンジの上に、半月前のラーメンの残りが入ったままになってる鍋見つけて、「ああ、やっぱり鍋あった。でもこの鍋じゃねえ、明日買ってくる。わたし、こう見えても料理うまいの」言いながら、断りもなく部屋にあがってきて、俺が酔いも少し醒めて、我に戻ったときには、狭い部屋いっぱいに、トランクや紙袋からとり出した皿やら

茶碗やら並んでいてさあ。
それも全部二人分ずつだぜ。
「俺が部屋では御飯食べないこと、知らないのか」
馬鹿なもんだね、咄嗟の時にはそんな言葉しか出ないのを、
「知るわけないわよ。まだ三回しか逢ってないのに」
「そうだろ、三回だろ。たった三回、それも行きつけの店で偶然、立ち話程度に……」
「でも、三回目のとき一緒に暮さないかって言ってくれたよ」
そう、確かに言ったかもしれないよ。はっきりとは憶えてないけど、そんなの、もちろん酒場での冗談だよ。真に受けること、絶対にありえないとわかってるから、冗談半分、いや冗談全部で口にしただけだし、今まで一人だって本気にした女はいないよ。
「じゃあ、わたしが一人目？」
俺の言葉にケロリとそう答え、それから俺が迷惑そうな様子なのにやっと気づいたらしく、「そういう顔似合わないよ。あの店で見せてくれたみたいな優しい顔してくれないかな」なんて俺の機嫌とろうと笑顔に笑顔を重ねるんだけど、「俺は酔っぱらってる時しか優しい顔人に見せないんだよ。そういうことも何も知らないで、ただの冗談真に受けて」俺がいよいよ腹立ててきたとわかると、微笑とめて、目を伏せてやっとしおらしい顔になってさ、
「冗談とはわかってたのよ。それほど馬鹿じゃないから……でも冗談でもすがりつきたいって、あの時そんな気がしたのよ。さっきから平然と図々しい女みたいに振舞ってるけど、本当は必死

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

なのよ。こんな恥かしいことしてるなら、いっそ諦めて、部屋飛び出そうかって」

「諦めるって、何を？」

「わかってるじゃないの」

最初に逢ったのは、新宿裏の例の店だったんだけど、たまたま隣同士に座ってほんの二、三十分世間話しただけの間に、一目惚れして、一生俺の傍にいたいって思ったっていうんだ。二度三度と逢うちに、いよいよその気持ちが強くなってきて自分でもどうしようもなくなったって。

その二度三度ってのも、俺の方じゃただの偶然だと思ってたんだけど、むこうの方は、毎晩あの店へ行っては待ってたっていうんだ。つまり俺、狙われてたわけだけど、そうとも知らずに半月前だったかな、三度目に逢った時、相当酔っ払ってたこともあって、あんな冗談言って「名刺くれない」って言うから、考えもなしに渡してしまったわけだよ。

いや、俺自惚れてこんな話してるわけじゃないぜ。惚れられたこと自慢しようって気はさらさらないね。

一度あの女の顔見てくれよ。一昨日の晩は雨降ってただろ？　枕カバーとそっくりの花柄のスカーフで顔包んでたんだけど、きちきちに結びすぎて膨んだ頬っぺたが、こう、はみ出して、細い目が垂れてて、おまけに、あれ、目を精いっぱい大きく見せようというんだろ、マスカラを目の太さの倍ぐらいに描いてて、それが雨のせいで溶けかかっててさあ、あんなのにモテたからって、ちっとも自慢にゃならないからさあ。まあ、そこん所は当人も気づいてるらしくて、「だったらだったで順序踏めよ。電話かけてきて誘うとか手紙くれるとか。好きっていう言葉も聞かさ

れないうちに枕さげて押しかけてこられたって——第一、そっちは俺の名前知ってても、俺の方では名前も忘れてるんだぜ」

そう言ってやると、

「私なんか順序踏んでたら、絶対ゴールにつけないもの。あんたよりずっとつまんない男からでも誘われたことないし、私ね、愛敬よく振舞ってるから、男達も話し相手ぐらいにはなってくれるけど、こっちから誘ったりして女の部分ちょっとでも見せたら、すぐに背むけて逃げだされることわかってるから」

バッグから手鏡出して、頬へと条になって流れだしたマスカラ直しながら、ふっと自分の顔に目とめて、淋しそうにするんだ。俺、女の器量なんて問題にしたくないし、博愛主義でいきたいって思ってるけど、顔の悪い女ってのは、あれ鏡見る時少しでも自分を綺麗に見ようと視線歪めるんじゃないの、気持ちまで歪むんだよ、変にプライド高く澄ましてるの多いだろ？　まあ、それに比べりゃ、自分の器量わきまえてるってのは殊勝なことだし、可哀相な気も起こらなかったわけじゃないけど、俺の気持ち何も考えないで押しかけてきた勝手さにはやはり腹が立ってさ、

「ともかく、どんな理由があってもこんな常識違反は赦せないよ。他人と変わりない関係なのに、これじゃ押しこみ強盗と同じだろ。いや強盗の方がましだよ。力で襲いかかってこられたら、こっちだって抵抗のしようがあるし、追い出すこともできるけど、女がしおらしく好きだからなんて言ってるだけなら叩きだすわけにもいかんだろ？　そこらへん狙って来たのなら、俺、そういう卑怯なの一番嫌いだからね。ほんと、強盗の方がましだよ、一晩だけで済むんだから」

力で追い出せないぶん、言葉荒げて叩きつけてやったんだが、
「私も一晩だけでいいから――」
って、あれは媚びてたつもりなのか、そんな顔しても似合やしないのに、首ちょっと傾げて微笑して、目をパチパチさせて俺を見つめながら、
「それに私、盗みに来たんじゃなくて、あげに来たのよ。顔はともかく、これでも昔、ソープランドに勤めないかって誘われたことあるから」
そんなことまで言い出してさ。
「馬鹿、一晩だけって――もうその一晩も終わってるよ」
さすがにそこまで臆面もなく言われると、雨音まじりのまま窓に忍び寄り始めた夜明けの光同様に、気持ちも白々としてきて、いくら俺だって手出す気も起こらなくて、まあ、今まで住んでたアパートも昨日のうちに引き払って戻る所もないっていうから、昼まで寝ていくぐらいのことは赦してやることにしてさ、奥の部屋の畳まで本に埋まってるのを自分で片づけて寝ろって。
俺の方は万年床に倒れてそのまますぐに眠ってしまったけど、昼すぎに目を覚ますと、白いブラウスに着替えてエプロンなんかしてて、
「雨あがったし、いい天気よ。ね、せっかく作ったんだから食べて」
って、片づいた台所のテーブルの上にホテルの朝食みたいなのが並んでるんだ。
もちろん二人分――
食べるわけないじゃないか。喋る気も起こらなくてムッとした顔でドア叩きつけて、仕事に出

かけたんだが、夜になって戻ると、今度は晩御飯の支度して待ってるんだよ。一晩だけって約束だったのにさあ。今夜だってまだいるんだぜ。さっき戻ったら、俺が食べないことわかってるくせに性懲りもなく御飯作って待ってて、

「ねえ食べてよ。昨日から二人分食べてるから、もう、一キロは太っちゃった」

今夜のは腕によりかけて作ったからと言うんだけど、俺の大嫌いな鶏肉を、グロテスクにどろどろに煮こんだあんな料理、食べられやしないよ。鞄もおかずに飛びだしてきて、仕方なくこうやってお前の所へ来たんだけど――なあ、どうしたらいいと思う？

わずか二日のうちに奥の方の部屋片づいてるし、管理人さんには、「構治がいつもお世話になってます」って挨拶したらしいんだ。管理人のおばさんに、「何なの、あと女」って聞かれて答えに困ったよ。野良猫ってのは一度餌やると、もう食い終わった瞬間からわが物顔で家の中歩くっていうけど、同じなんだ。たった二日なのに、今夜なんか、「あっ、それとも御飯の前にお風呂入る？　湯加減ちょうどいいわよ」なんて、もう十年は俺と一緒に暮してるって落ち着いた口調なんだぜ。これから十年、いや一生俺から離れないって、あれは、そういう口調だったな。なあ、どうしたらいいと思う……

叩き出せばいいって、それができるくらいならお前に相談になんか来ないよ。

古いつき合いなんだからわかるだろ？

俺子供の頃からスポーツは得意だったけど、相撲だけは駄目でね、押されると、なんかこのまま押されてしまわないと相手に悪いような、ふっと、そんな気がしてさ、土俵際の勝負になると

必ず敗けてた。いや今だって、まがりなりにも出版社と呼べる所で編集者なんて肩書きでやってるけど、うちみたいな零細じゃ押しの一手しかないのに、作家に電話で頼まれりゃ、「わかりました、先生、何とかしてみます」なんて返答がいつの間にか口をついてて、電話切った瞬間から頭抱えこんで、結局酒飲んで憂さ晴らすしかなくて、今もってあんな会社でもうだつあがらないわけだけど……

それと女とは別だって？　そうかなあ、同じだって気がするなあ、押されりゃあんな女にだって押しだされそうな気がするし、かと言って、あんな女だけは絶対嫌だからね、仕方がないから逃げまわってるんだよ。俺が家賃払ってるから、間違いなく俺の部屋なんだけど、あいつがわが物顔でいると、何となく俺の方が寝泊りさせてもらってるような、そんな気にもなったりして……

いや、お前に今さら隠しだてしたって始まらないから、本当のこと言っておく。

俺がこそこそとここまで弱気になってるのは、それだけの理由があってさあ、あいつ、たった二日のうちに部屋の主みたいにおさまってるけど、野良猫と同じで、それ、俺が餌与えちゃったこともあるんだよ。そう、一昨日の晩。

あの晩、俺、ずっと惚れてる女に誘いの電話かけたら、素っ気ない返事で断られてね、どうもこの頃、俺への態度が冷たすぎるんだが、他に男できたか、とうとう俺に嫌気さしたかどちらかだろうって、そう思いながら、自棄酒呷って部屋に戻ったんだよ。そうしたらそこに枕さげて別の女がいたわけ。美人とは程遠かろうが、図々しい嫌味な奴だろうが、ともかく女であることは

間違いない一人の女が俺を待ってたわけ。
うまく説明できないけど、男なんだからさ、わかるだろうが……
いや、確かに俺虫酸さえ走って、「じゃあ一晩だけ勝手にそっちの部屋で寝ろっ！」て啖呵切って背向けて布団かぶった、確かにそこまではやった……けどその後、しばらく、枕抱いたまま、畳に目ふせて、身動き一つしなかった女が、突然、魚が跳ねるみたいに、いやほんと、水音聞こえるほどイキのいい跳ね方で飛びかかってきて、反射的に防禦態勢になった俺の体凄い力で押さえこみながら、「襲いかかってるんだから、抵抗してよ。抵抗してぶん殴って追い出してよ。そうでないと、私、この部屋出ていけないの」
いつの間にか、涙声になってさあ、床につくまで俺、不貞腐れて一人酒ガバガバ飲んでたからその酔いが一気に回ってきて、あっ部屋がぐるぐる回るって思ってるうちに、体まで回転して俺が上になってて……そう、気持ち押せないとわかって、体押してきたんだ、あの女。
また、土俵際で負けちゃったわけだよ。仕方ないよ、あんな時に男ならウッチャリなんてかけられるかよ。
そいで、昼すぎに目醒ますと、もうエプロンだろ。いくら他の女の身がわりだからってよくこんな女と、と思うと顔も見たくないし、口もききたくなくて、服着こむと同時に、顔も洗わず、飛び出そうと思ったんだけど、むこうが喋るのは防ぎようがなくて、声だけは聞こえてくるよ、その声が、俺がドアにたどり着くまでの短い間に、突然、こう言ったんだ、爽やかな声でさあ……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.